研究論文

ランボーによる「都市の設計」

散文詩「都市」からル・コルビュジエへ

彦江智弘

1.「都市」のアナクロニズム

19世紀と20世紀を跨ぐフランス第三共和政期の文学に都市ないしは都市計画という観点からアプローチを企てるとき、まっさきに視界に現れるのははたしてどのようなテクストであろうか。様々な作家の名前が浮かび上がるなか、とりわけランボーのいくつかの作品はそのようなテクスト群の嚆矢といえるはずだ。よく知られるように、ランボーの『イリュミナシオン』には都市をテーマとする一連の散文詩――「都市」「都市［I］」「都市［II］」「労働者たち」「都会人メトロポリタン」「岬」等[1]――が存在しており、これらのテクストは1870年代前半、つまり第三共和政の最初期に執筆されたとみなされている。だがそうであるが故に、第三共和政が始まって未だ数年しか経過していないこの時期に執筆され、なおかつ当時滞在していたロンドンにおいて構想されたと思しきこれらのテクストに来たるべき都市や都市計画の問題を見ることには、必然的にアナクロニズムがつきまとうのではないか。実際、第三共和政はこの先1940年まで実に70年近くも続いていくことになる。この時期ランボーはパリでの生活経験があったが、パリ・コミューン前後のそのパリは未だ第二帝政の延長にある首都であり、パリ・コミューンの傷跡が生々し

い都市であったはずだ。「都市の形態(かたち)のすみやかにかわることは、ああ！　人の心及ばぬほど[2]」。1850年代末にボードレールがこう表現した都市の変化のスピード感はランボーの時代にも共有されていたにちがいない。だがそれでも1870年代初頭の数年間で大局的な変化がパリの街を覆い尽くしたと考えるのはむしろ難しいように思われる。だとしたら第三共和政の都市や都市計画に関する限り、ランボーのテクストの及ぶ範囲はむしろ限定的であると考えるべきではないだろうか。

ここではまた別のアナクロニズムにも目を向けてみたい。それはランボーの翻訳に観察されるアナクロニズムである。ここで問題となるテクストが「都市Ville」である。ランボーの詩作品は、1920年代から現代にいたるまで夥しい数の日本語訳の試みが存在しているが、現時点で最も入手しやすい翻訳の一つである鈴木創士訳『ランボー全詩集』(2010)を開くと、「都市」の冒頭の一文が以下のように訳出されている。

> 俺は、都市計画においても、家々の調度品と外観においてもあらゆる既知の趣味が回避されたがゆえに現代的であると信じられているある都市の、つかの間の、そしてさして不満もない市民である。[3]

第三共和政期の文学がいかにして同時代の都市や都市計画の問題と交差するかに関心を寄せる者にとって、このように書き出される「都市」というテクストがことのほか大きな重要性を持つことは容易に理解されるだろう。ここではランボーその人が「都市計画」という言葉を使用しているかのようではないか！　この「都市計画」という訳語は他にも清岡卓行訳と鈴村和成訳でも採用されている[4]。ところがフランス語の原文においてここで使用されているのは、« urbanisme »ではない。« le plan de la ville »というより多義性を内包した表現である[5]。しかも都市計画史を辿り直すことで分かるのは、この時代には未だ« urbanisme »という語は存在していなかったとい

う事実である。この用語がヨーロッパ諸語で初めて使用されたのは、バルセロナの市街拡張計画を主導したスペインの建築家イルデフォンソ・セルダによってである[6]。セルダは1867年に出版された『都市化の一般理論』において都市空間の編成を対象とする新しい科学の呼称として« urbanismo »という語を考案する。ランボーによる『イリュミナシオン』執筆に先立つことわずか数年のことである。しかしセルダの『都市化の一般理論』の影響力はスペイン以外ではむしろ小さく、しかもフランス語版の出版は原著の刊行から100年以上が経過した1979年にすぎない。その間フランス語圏では、1910年にヌーシャテル地理学会会報で「居住、特に都市居住を、人類の要求に適合させる方法の体系的な研究」を指す言葉として用いられたのが« urbanisme »の初出とされる。その後1919年にはフランスで初めての都市計画法であるコルニュデ法が成立し、同年には都市高等研究院が設立され、以降フランスにおける都市計画研究の拠点となる[7]。

このようにランボーの「都市」において「都市計画」の一語は時宜に適っていない場違いな言葉だということは確認しておくべきであろう。こういった事情を踏まえてのことか、あるいはそもそもテクストにおいて« urbanisme »という語が用いられていないことを考慮してのことか、1960年代以降の他の主要な日本語訳では「都市計画」という訳語はむしろ避けられる傾向にあるようだ。例えば粟津則雄訳(1965)では、そもそもの単語の多義性を尊重したことが推察されるが、「街のプラン」と訳され、これ対して「都市計画」に幾分近いニュアンスを含んだ「設計」という語を用いるのが渋沢孝輔訳(1978)、宇佐美斉訳(1996)、中地義和訳(2006)である。以下に、清岡訳・鈴村訳も含め各訳文を引用しておく(強調はすべて引用者)[8]。

> 家々のなかやそとの飾りつけからも町のプランからも誰でも知っているような好みはことごとく除き去られているために近代的と思われている首都のおれは一時だけのたいして不平もない市民なのだ。(粟津訳)

家々の外観においても内装においても、街の設計においても既知の趣味は一切避けられているために近代的とされている一首都の、私は束の間のさして不満もない市民なのだ。（渋沢訳）

都市計画におけると同様に、室内装飾においても家の外観においても、既知の趣味はどんなものであろうとうまく避けられている。そのために近代的である首都の生生しさのなかにいて、ぼくは束の間の、そして大した不満もない一人の市民である。（清岡訳）

私は、家屋の内装や外観、ならびに都市の設計において、一切の既知の趣味が回避されているがゆえに現代的と信じられているある主要都市の、束の間のさほど不満でもない市民だ。（宇佐美訳）

私は、家々の内装や外観においても都市の設計においても、いっさい既知の趣味が回避されているがゆえに現代的と信じられている一都市の、つかの間の、たいして不満でもない市民です。（中地訳）

僕は剝きだしの現代首都のさして不満もない通りすがりの市民、それというのも、知られる限りの趣味は回避してしまったからだ、——家具や家々の外観、また都市計画のなかに。（鈴村訳）

それでは英訳においてはどうだろうか。そもそも原文の« plan »をそのまま英語の単語として使用することにそれほどためらいがないという事情があるのか、例えば« the plan of the city »という訳語が採用されるケースがある[9]。ここで想起されるのが、英語圏においては長らく« urbanism »という語は定着せず、都市計画を指す語として« town planning »（アメリカでは« city planning »あるいは« urban planning »）が採用されてきたという点である[10]。「都市」がランボーのロンドン滞在と切り離せないと考えるならば、« le plan de la ville »をこの«

town planning » と関連付け、ここから「都市計画」という訳語を導き出す理路が拓けるように見えなくもない。ところが「都市計画」を指す語として « town planning » が登場するのは、« urbanisme » の初出とほぼ同時期の1906年のことであるとされる[11]。ランボーの「都市」に「都市計画」を見ようとする読解にはやはりアナクロニズムが抗いがたくつきまとって離れないように思われる。

他にも「都市」の英訳には、« le plan de la ville » に « the layout of the city » という訳語をあてるケースがある[12]。つまり「あらゆる既知の趣味が回避された」ということをまずは家屋の内装や外観における意匠の配置（レイアウト）の問題と捉え、ランボーがこれを都市空間全体に拡大適用しているのだという認識がこの訳文からは汲み取れそうである[13]。このような認識は、上に述べたセルダ以降の科学的アプローチとしての都市計画というよりも16世紀から連綿と続く「美装 embellissement」にむしろ近いものであるだろう。三宅理一によれば、「現在ではごく普通に用いる「都市計画（ユルバニスム）」の用語も当時は存在せず、都市整備に関する考え方も17世紀の時点ではこれまた大きく違っていた。[…] フランス革命以前のアンシャン・レジーム下においては、それにもっとも近い言葉として「美装（アンベリスマン）」の用語が用いられていた。町を美しく装うことの意味だが、この言葉自体は17世紀の古典主義のなかで登場し、やがて制度として定着して言ったものである。その実態は、制度上、「道路整備（ヴォワリー）」に重点が置かれ、わかりやすく言えば、「道路や街路をきちんと整備することによって、町を美しく仕立てる」というかたちで、都市行政がなされたということである[14]」。この「道路や街路をきちんと整備することによって、町を美しく仕立てる」とは、つまるところ都市のレイアウトの問題と捉えることが可能であろう。このように「都市」に現れる « le plan de la ville » という表現は様々な文脈において都市計画を喚起するが、そのどれもがアナクロニズムに捉えられているように見える。やはりランボーの「都市」において「都市計画」の一語は時宜を逸した場違いな言葉であると改めていわざるをえないのではないか。

むろんここで問題になっているのが、あくまでも都市整備に関

わる大小様々な活動全般を指す広義の都市計画であると捉えることも可能かもしれない。だが本稿の目論見は « le plan de la ville » という表現の多義性を尊重しつつも、これをあえて狭義の「都市計画 urbanisme」と関連付け、19世紀後半から20世紀前半にかけての都市計画の成立と展開を召喚することでランボーの「都市」を都市計画という観点から読解する端緒を開くことにある。そもそも都市計画が必ずしも実際の都市として実現するわけではなく、その多くは部分的な実現、あるいは理論的な段階にとどまることを踏まえるならば、なおのことランボーは来たるべき都市計画の実際を知りえなかったはずだ。だがここで先取りして述べておけば、« plan » は20世紀初頭に勃興する都市計画において極めて重要な概念でもあった。それにそもそも「あらゆる既知の趣味が回避されたがゆえに現代的であると信じられているある都市」とは、例えばル・コルビュジエに代表される来たるべきモダニズムの都市計画にこそふさわしいように見える。

以下の章では、まず「都市」と同時代のロンドンとの関係を検討し、ついで都市計画の成立過程を概観する。その上で都市計画史という観点から「都市」の読解の可能性を素描したい（ただし紙幅の制約の都合上、テクストの包括的な読解については稿を改める必要があることを予めお断りしておく）。したがって本稿では以降「都市計画」という語をたんなる都市整備ではなく、19世紀末から20世紀初頭にかけてヨーロッパ各国で誕生し、国際的な影響関係のなかで練り上げられていく、都市の科学を成立させるという野心によって特徴づけられた « urbanisme » に対応する語として用いることにする[15]。

2．様式の回避か回帰か？

まずは1871年初頭から74年末までのランボーの都市経験を確認しておこう。1870年の段階ですでに2回の出奔を経験していた16歳のランボーは、翌71年1月に普仏戦争の休戦協定が結ばれると、そのおおよそ一ヶ月後にパリに向かい2週間ほど首都に滞在する。そ

の後３月半ばにパリ・コミューンが勃発。ランボーは民衆蜂起のパリに２〜３週間ほどとどまったともいわれているが、真偽のほどは定かではない。さらにコミューン崩壊後の９月末には、ヴェルレーヌの招きでパリに滞在。翌1872年の３月末までの約半年間をパリで過ごす。シャルルヴィルに一旦帰郷した後、５月には再びパリへ。そしてそのまま７月の初旬からヴェルレーヌと共にブリュッセルに２ヶ月間逗留した後、二人は9月初旬にロンドンに旅立つ。彼らはロンドン中心部のブルーズベリー地区に住まいを見つけ、ランボーは12月末までロンドンにとどまる。しかし翌73年1月半ばにはロンドンに残してきた病身のヴェルレーヌの元に戻り、4月初めまで生活を共にする。さらに二人は5月末に再度ロンドンに舞い戻り、今度はリージェンツ・パークを挟んでブルーズベリー地区からみて北側にあるカムデン・タウンの住人となる。今回の滞在は7月初めまで続くだろう（今回の滞在はいわゆるブリュッセル事件に終わる）。その後、ランボーは翌1874年の3月半ばから12月末までロンドンに再度滞在。ランボーと今回の道連れであるジェルマン・ヌーヴォーはウォータールー駅の傍に棲家を見つけることになるだろう。

こうしてみるとランボーは1871年初頭から74年末までのおおよそ4年間のうち8ヶ月ほどをパリで過ごし、とりわけロンドンについては72年9月から74年末までの期間に、断続的であるとはいえ実に1年半近くも滞在したことになる。第二帝政が普仏戦争によって潰え、第三共和政が成立するもパリ・コミューンによって困難な幕開けとなったこの時期、ランボーにもっとも馴染みのある都市はロンドンであったといっても過言ではないだろう。ならばロンドンの経験がテクストにおいて主題的に取り上げられる、あるいはその影響が何らかの形でテクストに滲み出していると考えるのはごく自然な成り行きではあるだろう。もちろんこのような読解に対して慎重な立場も存在しており、例えばセルジオ・サッキは次のように述べている。「仮に「都市」の物理的出発点が例えば優れて現代的な大都市であるロンドンだとして、だからといってロンドンがこの詩の本当の主題であるということはまずありえない――［« Ville » という］冠詞がつ

かないタイトルからすると、どう見てもこの詩が描くよう定められているのはなにがしかの特定の都市ではなく、むしろ(C. A. ハケットの言葉を借りれば)「あらゆる街や都市の性質や本質であり、街というものの“イデア”」なのである[16]」。私たちもこのような観点に基本的に賛同するものであるが、上に述べたような伝記上の経緯を踏まえるならば、『イリュミナシオン』の都市詩篇においてロンドンが描き出されているとみなす立場にも一定の正当性があるように思われる。実際、テクストに散りばめられたイギリスにまつわる一連の単語はこのような方向性の読解を誘発せずにはおかないからだ。「都市」についていえば、例えば「コテージ cottage」という英単語の使用や対比的に持ち出される「大陸の諸国民」という表現はここで問題となる大都市をロンドンと重ね合わせるよう私たちに働きかけているようにみえる[17]。

さらに一歩踏み込んで、「都市」が冒頭の一文からロンドンの街を描き出していると考えるのが、V. P. アンダーウッドである。このテクスト冒頭の一文に関して、アンダーウッドは『ランボーとイギリス』において次のような主張を行っている。「「現代的と信じられている crue moderne」とは、イギリス人の自負を揶揄しているにせよ、「現代的なもの」に熱狂するこの若者の失望を表しているにせよ、ヴィクトリア朝の大都市にこそふさわしい形容辞である。実際、この都市は「いっさいの既知の趣味が回避された」、真新しく金のかかった建造物に満ち溢れていた[18]」。「都市」の冒頭の一文にはイギリスを参照点とするような明らかな表現は見られないはずだが、このようにアンダーウッドはヴィクトリア朝の建造物の特徴に着目することで、「都市」において問題になっているのがロンドンだと断定する。だが「いっさいの既知の趣味が回避されている」とは本当にヴィクトリア朝のイギリス建築にふさわしい描写なのだろうか。

実際、ヴィクトリア朝とはまずなによりもゴシック・リヴァイヴァルによって際立つ時代だというのが建築史を持ち出さずとも広く共有された認識であろう。「リヴァイヴァル」という語が端的に示すとおり、これは「既知の趣味の回避」ではなく「回帰」の運動にほか

ならない。ゴシック・リヴァイヴァル自体は18世紀半ばに始まったとされるが、ヴィクトリア朝における代表的建築物は1834年の失火で焼け落ち、1840年代に再建が始まるチャールズ・バリー設計によるウェストミンスター宮であろう（再建工事は1860年代まで続く）。注目すべきは、この国会議事堂再建の設計競技に際して王立委員会がネオ・ゴシックもしくは新古典主義様式での設計という規定を課した点である。つまりヴィクトリア朝においても既存の様式に則るという意識は未だ強く残っていたのである。このような意識は1850年代後半のいわゆる「様式戦争」においてさらに先鋭的な形で現れる。これはイギリス外務省の再建計画をめぐって巻き起こった混乱と論争であり、ここでも同じくネオ・ゴシック様式と新古典主義が対立することになる。しかもこの時代ネオ・ゴシックや新古典主義以外にもイタリア・ルネサンス様式が採用される、あるいはクィーン・アン様式などヴァナキュラーな様式が見直される動きもあり、大石和欣に従えば、「結局のところ19世紀ロンドンの建築物は多種多様であったし、それぞれの様式も近代文化・生活のなかで異なる伝統を折衷し、混じり合わせて発展させたもの[19]」にほかならない。つまりヴィクトリア朝の建築においては様式が「回避」されたわけではなく、フランスの第二帝政期の代表的様式であるナポレオン三世様式がそうであるように、むしろ様々な様式が混在・混淆するような状況にあったのだ。

だとすれば「既知の様式の回避」という表現に依拠することで「都市」において描き出されるのがロンドンであると仮定するのはむしろ難しいのではないだろうか[20]。この点について、出口裕弘は端的に次のような疑問を表明している。「ロンドンとは似ても似つかない都市を、状況を殊更ロンドンふうに設定した上で、ランボーはなぜ私たちに提示してみせたのだろう。／やはりこれはイロニーなのだと思う[21]」。上で見たようなヴィクトリア朝の建築様式の状況をふまえるならば、このような出口の懐疑は正当なものであるように私たちには思われる。それにこのような懐疑こそがランボーの「都市」を来たるべき都市計画という観点から考察する際の出発点にな

るはずだ。実際、出口も「都市」が描き出すのが同時代のロンドンではなく「ロンドンの未来透視図[22]」であるという見立てを提示している。

だがこの「未来透視図」は必ずしもロンドンに限定されないのではないだろうか。実際、すでに述べたとおり、「あらゆる既知の趣味が回避されたがゆえに現代的であると信じられているある都市」とは、同時代のロンドンではなく、むしろル・コルビュジエが思い描いたような従来の様式との断絶が露わな近代建築から織りなされる都市にこそふさわしいように思われる。ここで想起したいのが、ル・コルビュジエが『建築へ』(1923) においてライトモチーフのように繰り返す「建築は「様式」とは関係がない」という命題である。例えば、「建築は「様式」とは関係がない／ルイ十五世、十六世、十四世様式やゴチック様式は、建築には婦人の頭の羽飾りのようなもので、時には美しいが、常にというわけではなく、それ以上のものではない[23]」。しかしだからといってル・コルビュジエはやみくもに過去の様式を否定しているのではない。また様式そのものを否定しているわけでもない。ル・コルビュジエが様式について問題にするのは、「絶対命令である近代の精神状態と何世紀もの残骸の息づまる蓄積との間に、大きな不調和が現れている」(243;230) という事態にほかならない。つまり過去の様式は「絶対命令である近代の精神状態」とは決定的にそぐわないという鋭い意識がル・コルビュジエを過去の様式の否定に向かわせるのである。その一方でル・コルビュジエは「近代の精神状態」に基づく様式を確立するという使命を自らに課す。ル・コルビュジエにとってそれは新しい機械文明に基づく様式にほかならない。ここから有名な「家は住むための機械である」(73;75) というまた別のル・コルビュジエのライトモチーフが帰結することになる。ル・コルビュジエが構想するモダニズムの都市計画もかかる認識の上に成立していることは言うまでもないだろう。

3．第三共和制における都市計画：排除から包摂へ

このように建築の様式に関してはランボーの「都市」が同時代の建築ではなく来たるべきモダニズム建築と親和性があるという視点は比較的確保しやすいと思われるが、こと都市計画については一見するとオスマンの首都改造以降停滞していると見えなくもないモダニズム以前の第三共和政の都市計画の誕生と展開を確認しておく必要があるだろう。実際ここで注意を喚起しなければならないのが、なにもル・コルビュジエを始めとするモダニズムの建築家たちが都市計画を発明したわけではないという点である。上で見たように、1920年代以前に都市計画は産声を上げ、なおかつすでに制度化されていた。ここでこの都市計画成立の文脈を主に都市計画史家のフランソワーズ・ショエの整理に従って概観しておこう[24]。

« urbanisme » という工学的知として結実することになる都市計画が背景とするのは、言うまでもなく旧来の都市構造の維持を困難にし、いたるところに無秩序をもたらした産業革命後の社会の急激な変化である。このような混乱にいかなる秩序をもたらせばよいのか？　さらには社会の進展に応じた都市としていかにヴァージョンアップさせることができるのか？　これらの問に答えるために練り上げられることになるのが都市計画という科学であるとして、まずショエは二つのプレ・ユルバニスムの流れを確認することから始める。ひとつは、オーウェンやフーリエやカベといった思想家や実践家によって代表される進歩主義的プレ・ユルバニスムである。進歩主義的プレ・ユルバニスムの根底には、あらゆる蓋然性や差異を捨象し、人間を科学的に帰納可能な類型的欲求の束として定義する態度が存在している。このような人間観を出発点として、時代と場所を問わずすべての人類に適用可能な合理的都市秩序がモデル化される。これに対してジョン・ラスキンやウィリアム・モリスといった主にイギリスの思想家によって代表されるのが文化主義的プレ・ユルバニスムである。文化主義者の場合、進歩主義者とは異なり個人は人間集団の中に有機的に組み込まれており、このような集団性の社

会的モデルが文化的な過去によって与えられる。そしてこのような文化的コンテクストを参照しながら新たな都市秩序が模索されることになる。このようなプレ・ユルバニスムの二つの流れのいずれもがユートピア的傾向を多分に含んでいることは容易に理解できるだろう。しかし時代が下るにつれこれらはより現実的な路線として発展することになる。前者については、トニー・ガルニエやグロピウスやル・コルビュジエといった都市計画家や建築家の実践に引き継がれることになるだろう。後者の文化主義的傾向は、とりわけエベネザー・ハワードの田園都市構想に流れ込むことになる。

このような二つの傾向が産業革命後の都市を襲う急激な混乱に対するリアクションとして生起したとして、社会の産業化を都市の無秩序としてのみ捉えていては事態の一面しか捉えていないことになるだろう。実際、産業社会の到来によって人や物の流通経路の構築など新しい都市機能の整備の必要性もまた高まっていた。つまり性急にユートピア的ヴィジョンに飛躍するのではなく、潜在的に形成されようとしていた産業社会に適合した新しい都市秩序と目の前の都市の混乱とのギャップを解消するというよりリアリスティックで喫緊の課題も存在していたのである。そしてこれに取り組んだのが、ほかでもない第二帝政下にセーヌ県知事に任命されたオスマン男爵である。オスマンのパリ改造は、来たるべき都市秩序のモデルを開発するのではなく、交通網など現実の都市機能を大胆に調整して、日々発展を遂げる産業社会に適合した都市として首都を再整備することにあった。そのためオスマンの事業は、オスマン自身が度々使用する表現をふまえ、本来の都市計画ではなく「整序化 régularisation」として位置づけられることになる[25]。

ここで、すでにふれたイルデフォンソ・セルダに改めて言及しておきたい。実際、セルダが関わったバルセロナの再整備計画はこのオスマンの首都改造とほぼ同時代であり、セルダ自身パリに長期滞在しオスマンの事業の調査を行っている。示唆に富んでいるのが、そのセルダの著作がバルセロナの整備計画を前提にしているにもかかわらず、『都市化の一般理論 *Teoría General de la Urbanización*』

(1967) と名付けられていることである。むろんこのようなタイトルに集約される都市へのアプローチは自ずと科学的方法論を要求するだろう。これに対してオスマンも統計資料などを活用していたとはいえ、その手法は多分に直感的だったことはつとに知られている。もとよりオスマンには理論化の意思もなければ、事後的に他の都市に影響を与えることになるとはいえ、一般的モデルを構築する野心も持ち合わせてはいなかった。そのような態度はオスマンが残したのが理論書ではなく回想録だけだったことに端的に見て取れるだろう。その一方で、オスマン以降に練り上げられていく都市計画は都市の科学として自らを確立する際にこれらの特性を基盤に据えるだけでなく、それを未来に向けた都市の発展のヴィジョンによって方向づけようとしていた。

第三共和政における都市計画の成立を「プラン」という観点から分析したジャン＝ピエール・ゴダンの研究によれば、都市に対する科学的な包括的方法論を精緻化するという意識はそれ自体で自己目的化していたわけではなく、「初期の近代的都市計画家たちが意図していたのは、通時的な分析こそが重要で、過去に目を向けた分析を行うにしても、それは一定の進化の原理を引き出すためだった[26]」という。このような未来に向けたヴィジョンがオスマンに欠如していたわけではないが、都市計画の成立過程で予想ではなく計算に基づく予測への転換が徐々に図られ、様々なシミュレーションの技法が補完的に動員されるようになることをゴダンは指摘する。そしてとりわけ公共交通網の将来の結節像や人口動態のモデリングや土地利用の予測的ゾーニングなどが「プラン」として結実し、都市計画の内実をなすようになる[27]。

興味深いことに、このような方向性での都市計画の生成を担ったのは必ずしも建築家たちではなく、民間のシンクタンクの先駆けとして名高いミュゼ・ソシアルに創設された都市農村衛生部会を母体にネットワークを構築していた社会改革者たちだった。このことが意味するのは、都市計画がその黎明期から社会問題を見据えた戦略的都市環境構築を目的としており、社会的あるいは政治的プログラ

ムの一環として捉えられていたということにほかならない。これまで産業革命後の都市の混乱や無秩序と表現してきたものは、見方を変えれば社会的紐帯の危機であり、犯罪など社会を切り崩しかねない諸要素の温床であり、社会的コンフリクトの火種でもあった。都市計画を担った社会改革者たちにとって、都市計画は経済的発展に見合った都市改造という課題を超えて様々な社会問題を工学的知によって解決に導く手段でもあったのだ。これはすでにふれたゴダンも強調する点である。「1900年代の都市計画の推進者たちの射程は、従来は組合や革命党によって担われてきた社会組織の再構築という野心に深いところで対応していた。「都市cité」という語が当時の都市計画関連のテクストで頻繁に用いられるとしたら、それは美辞麗句でもなければ魅惑的な懐古趣味によるものではない。なぜなら夢見られていた「再建された都市」はおそらく爆撃によってではなく社会的コンフリクトや階級間の根本的な分裂によってばらならになってしまっていたからだ[28]」。つまりこと労働者階級や都市の下層民に関しては、オスマンの首都改造がもっぱら排除の理論によって推進されたとしたら、第三共和政期の都市計画はむしろ包摂を目指していたと整理することができるだろう。

だがこのような方向性で都市計画の成立を推進した社会改革者たちは、必ずしも強力な影響力を持つ都市モデルを提示したわけではなかった。彼らの成果はフランス建築家・ユルバニスト協会に発展する方法論上の模索や人口一万人以上の都市に「整備・拡張・美化計画Le Plan d'aménagement, d'embellissement et d'extention」の策定を義務付けたコルニュデ法の制定といった制度面にむしろ求められるべきかもしれない。これに対して1920年代に、大胆な都市モデルを華々しく提示するのがル・コルビュジエらモダニズムの建築家たちである。ル・コルビュジエは1922年に「300万人の現代都市」のプランを発表し、23年から24年にかけて『建築へ』と『ユルバニスム』を立て続けに出版。1925年には自身の都市計画モデルをパリに適用した「ヴォワザン計画」を公表し一躍注目を集めるなど、この時期矢継ぎ早に自身の建築論・都市論を喧伝している。ほかでもないこのル・

コルビュジエにとっても「プラン」は重要な概念のひとつだった。それは例えば『建築へ』において繰り返される「プラン」についての命題に端的に読み取れるものである。ル・コルビュジエは例えば次のように主張する。「プランは産み出す母体である。／プランがなければ、無。／プランはそれ自身の中に感覚の本質を持つ。／集団の必要が課す明日の大問題は、新たにプランの問題を提起する。／近代生活は、家のため、都市のための新しいプランを求め、待つ」(XVIII; VI)。もちろんミュゼ・ソシアルの社会改革者たちが想定するプラン概念に対してル・コルビュジエのそれがどのような独自の屈曲を示しているかは検討が必要であろうが、ル・コルビュジエにおいても都市計画は社会的なものと無関係ではないことは、この引用からも十分読み取れるであろう。

このようなヴィジョンをより濃縮されたかたちで象徴的に示しているのが、「建築か、革命か。／革命は避けることができる」(243; 17)という『建築へ』におけるもうひとつのライトモチーフをなす命題である。ル・コルビュジエにとって建築とは、先に述べたようなたんに現代社会に対応した様式の構築に尽きるものではなく、むしろそのような様式に基づく建築を駆使して革命を避けることを使命としていたのである。この点においてル・コルビュジエの立場は都市計画の確立を推進してきた社会改革者たちと大きく異なるものではないとひとまずは捉えることが可能であろう。しかもル・コルビュジエは1930年代になるとこのような「プラン」のヴィジョンをほかでもない『プランPlans』と命名された雑誌において展開することになる。これは弁護士のフィリップ・ラムールを中心に1930年に創刊された総合誌で、政治や社会問題のみならず芸術や文学など広範な領域を対象に新たな社会設計を模索する意図を持っていた。いわばル・コルビュジエの建築や都市計画の「プラン」が狭義の建築の技術的問題を超えたより広範な社会的プログラムを潜在的に含んでいたことがこの『プラン』への参画から自ずと浮かび上がってくるはずである[29]。

4.「都市」の都市計画的読解へ

ここまで概括したとおり、「プラン」が黎明期の都市計画を貫くひとつの軸をなすとして、ランボーの「都市」に現れる「都市の設計le plan de la ville」という表現に来るべき都市計画の展開を関連づけることは、アナクロニズムと行きすぎた歴史的負荷をこの表現に与えることになるのだろうか。だが「都市」を1870年代初頭のロンドンを写したものではなくひとつの「未来透視図」とみなした場合、このテクストは19世紀後半から模索され醸成されていく都市計画という知を予見するものとして立ち現れてはこないだろうか。それにもとよりランボー自身が「都市の設計」を持ち出す以上、「都市」の話者（冒頭で与えられる「私」）は目の前に広がる都市の背後に何らかの「プラン」の存在を透視していたはずだ。だとしたらそれはいかなる「プラン」なのだろうか。あるいはその「プラン」はどのような都市計画として実現するのであろうか。テクストの展開をたどれば、この「プラン」が「既知の様式が回避されている」という様式上の問題を超えていることは容易に見てとることが可能である。「都市の設計」の直後に現れる「つかの間」という表現はこの都市が文化主義的プレ・ユルバニスムのように文化的起源を持っておらず理性的な設計に基づくことを示唆していると捉えることができるとして、ここでの「都市の設計」は都市生活の利便性を高めるというレベルを遥かに超えて、そこに暮らす人々の生活の隅々にまで浸透し作用を及ぼしている。実際、テクストは「家々の内装や外観」といった狭義の建築的問題から「迷信的記念物」を経て「道徳」や「言語」さらには教育や労働や老いといった問題へと徐々に射程をより広範な社会問題へと拡張するような仕方で展開していく。しかも科学的方法論としての「統計」の活用さえこのテクストは見逃すことをしない。もちろん「幾百万の人々」が「一様な」生活を送るこの都市にはもはや社会的コンフリクト――あるいはル・コルビュジエのいう「革命」――が起こる余地などほとんど残されてはいないだろう。だが仮にそれが可能だとしたら、郊外にちがいないという認識が「都市」の後半部分の

荒れ狂うエクリチュールからは浮かび上がってくる。本稿ではふれることができなかったが、都市郊外の整備は黎明期の都市計画において重要な課題となる問題だった。

この郊外の問題も含め概略的にしか示すことができなかった「都市」の都市計画的読解の可能性は、ここでは十分活用できなかった「都市」読解の蓄積を踏まえ、稿を改めてより精緻に検討する必要があることはいうまでもないだろう。また『イリュミナシオン』の都市詩篇の他のテクスト、とりわけ「都市〔I〕」「都市〔II〕」も「都市」に埋め込まれた都市計画的主題の延長で捉え返す道筋をつけることが可能であるように思われる。いずれにせよオスマン的都市でもなければ、コミューン後のパリでも同時代のロンドンでもなく、かといって曖昧にユートピア／ディストピア的と称される虚構の都市でもなく、現実の都市の影を宿しつつも総合的な「プラン」として存在する都市を示したという意味において、ランボーの「都市」は貴重なテクストであると言えるはずだ。しかもランボーのこの「プラン」は第三共和政期に文学とほとんど交わることなく成立しようとしていた都市計画という知を文学によって照射するひとつの視座を私たちに提供してくれるのではないだろうか。その時ランボーの「都市」は、例えばジュール・ヴェルヌの『ベガンの遺産』(1879)やクローデルの『都市』(1893/1901)、あるいはヴェルファーレンの『触手ある都市』(1895)やゾラの『労働』(1901)といった一群のテクストとともにひとつの問題系をなすことになるであろう〔30〕。

註

1　これらの作品のタイトルはすべて『ランボー全集』(青土社、2006)所収の中地義和訳『イリュミナシオン』に倣った。また本稿中の訳文も断りの無い限りこの翻訳に依拠する。ランボーの原文に関してはアンドレ・ギュイヨーが編纂したプレイヤード版を使用した。Rimbaud, *Œuvres complètes*, édition établie par André Guyaux, avec la collaboration d'Aurélia Cervoni, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2009, p. 300-301. 本稿で中心的に取り上げる「都市 Ville」(263-264; 300-301)は、煩雑になることを避けるため以降

ページ番号の明記は行わない。

2 ボードレール「白鳥」阿部良雄訳、『ボードレール全集１』筑摩書房、1983、p. 165.

3 『ランボー全詩集』鈴木創士訳、河出文庫、2010、p. 108（強調は引用者）.

4 『新篇　ランボー詩集』清岡卓行訳、河出書房新社、1992、p. 157。『ランボー全集』鈴村和成訳、みすず書房、2011、p. 288。

5 例えばアンドレ・ギュイヨーは『イリュミナシオン』の註解において « le plan de la ville » を建築と捉えている。Arthur Rimbaud, *Illuminations,* texte établi et commenté par André Guyaux, Baconnière, 1985, p. 177.

6 松田達「ユルバニスムをめぐって」『10+1』n°. 45、2006、p. 165-166. « urbanisme » という語の成立事情は、松田の本論考において国際比較も含めて手際よくまとめられている。

7 松田達、同上、p. 163. なお « urbanisme » 以前に « urbanisateur » という語が1905年の段階ですでに使用されていたとの指摘もある。Jean-Luc Pinol et Walter François, *Histoire de l'Europe urbaine, t. 4. La ville contemporaine jusqu'à la Seconde Guerre mondiale,* coll. « Points Histoire », Seuil, 2003, p, 194.

8 「都市」『ランボオ　全作品集』粟津則雄訳、思潮社、1965、p. 393（なお小林秀雄訳でも「街のプラン」と訳されている。「街」『小林秀雄全作品２ランボオ詩集』新潮社、2002、p. 90）。『ランボー全集3』渋沢孝輔訳、人文書院、1978、p. 26.『ランボー全詩集』宇佐美斉訳、ちくま文庫、1996、p. 341。『新篇　ランボー詩集』清岡卓行訳、前掲書。『ランボー全集』中地義和訳、前掲書。『ランボー全集』鈴村和成訳、前掲書。

9 例えば以下の英訳がこれにあてはまる。Rimbaud, *A Season in Hell, The Illuminations,* translated by Enid Rhodes Peschel, Oxford University Press, 1973, p. 135; Rimbaud, *Complete Works,* translated by Paul Schmidt, Harper & Row, 1975, p. 228.

10 ただし « urbanism » と « town planning » は必ずしも同質のものではない。後にふれるように、« town planning » に対して « urbanism » は整備計画の策定だけでなく、関連学術分野や技術を動員した都市についての科学という側面が強いとされる。例えば以下の論考でも冒頭でまずこの点が強調されている。Clément Orillard, « *Urbanisme* and the Francophone Sphere », Carola Hein (ed.), *The Routledge Handbook of Planning History,* Routledge, 2018, p. 161.

11 Jean-Luc Pinol et Walter François, *op. cit.*, p. 194.

12 *French Poetry 1820-1950*, selected, translated and introduced by William Rees, Penguin Books, 1990, p. 311.

13 前掲の鈴木訳や清岡訳においては「都市計画」「家々の調度品」「外観」という流れになっているが、ここでは原文の語順通りに捉え、「家々の調度品」「外観」「都市計画」というふうにスケールが拡大していく流れとして解釈したい。この部分の原文は次の通り。« […] tout goût connu a été éludé dans les ameublements et l'extérieur des maisons aussi bien que dans le plan de la ville ».

14 三宅理一『パリのグランド・デザイン　ルイ十四世が作った世界都市』中公新書、2010、p. 170-171. 美装については以下も参照のこと。Philippe Genestier, « embellissement », Pierre Merlin et Françoise Choay (ed.), *Dictionnaire de l'urbanisme et de l'aménagement,* PUF, 2010, p. 290-291.

15 「都市計画 urbanisme」については、本文中でふれたような広義の理解が広く共有されているが、すでにみたとおり « urbanisme » はたんなる都市整備ではなくとりわけ都市の科学を成立させるという野心によって誕生した。例えばフランソワーズ・ショエに従えば、

「反省的かつ批判的特徴、そして科学的野心」によってこそ « urbanisme » はそれ以前の都市整備や都市への介入と区別されることになる（Françoise Choay, *L'Urbanisme. Utopies et réalités. Une anthologie,* Seuil, coll. « Points Essais », 1965, p. 8. あわせて以下も参照のこと。Françoise Choay, « Urbanisme », *Dictionnaire de l'urbanisme et de l'aménagement, op. cit.*, p. 797-802）。

16 Sergio Sacchi, *Études sur les* Illuminations *de Rimbaud,* Presses de l'Université de Paris-Sorbonne, 2002, p. 185（ハケットの引用の出典は以下。Cecile A. Hackett, *Rimbaud: a Critical Introduction,* Cambridge University Press, 1981, p. 64).

17 この点については例えば以下の論考を参照のこと。Marie-Claire Banqart, « Une lecture de "Ville(s)" d'*Illuminations* », *La Revue des lettres modernes. Arthur Rimbaud, 4,* Minard,1980, p. 25; Bruno Claisse, « *Ville et les ambiguité de la modernité* », *Rimbaud ou « Le dégagement rêvé ». Essai sur l'idéologie des Illuminations,* Musée-bibliothèque Rimbaud,1990, p. 85.

18 V. P. Underwood, *Rimbaud et l'Angleterre,* A. G. Nizet, 1976, p. 305.

19 大石和欣「混沌の「帝都」――ヴィクトリア朝時代の建築物のダイナミズム――」、山口恵里子（編）『西洋近代の都市と芸術8 ロンドン　アートとテクノロジー』竹林社、2014, p. 57.

20 「都市」の冒頭の一文については、三好美千代が全く別の観点から当時のロンドンに重なるという主張をおこなっている（三好美千代「ランボー：『イリュミナシオン』の二つの《都市》あるいはヴィクトリア朝のロンドン」『年報・フランス研究』(関西学院大学)、31号、1997、p. 135-147）。三好の論考において問題となるのは、より具体的には、スラム街として名高いイーストエンドから、そのスラムの住人たちの労働の場であったドック地帯にかけての街区である（p. 137-138）。

21 出口裕弘『帝政パリと詩人たち　ボードレール・ロートレアモン・ランボー』河出書房新社、1999、p. 323. 出口自身は « le plan de la ville » を「都市としての仕組み」と訳している（p. 321）。

22 出口、同上、p. 324.

23 Le Corbusier, *Vers une architecture,* Flammarion, coll. « Champs Arts », 1995, p. 15（ル・コルビュジエ－ソーニエ『建築へ』樋口清訳、中央公論美術出版、2011、p. 27）. 以下、本書からの引用は本文中に原著・翻訳の順に示す。

24 Françoise Choay, *L'Urbanisme, op. cit.*, p. 10-26 ; « Pré-urbanisme », *Dictionnaire de l'urbanisme et de l'aménagement, op. cit.*, p. 623-625; « Urbanisme », *ibid.* p. 797-802.

25 Françoise Choay, « Pensées sur la ville, arts de la ville », dans Maurice Agulhon (ed.), *La Ville de l'âge industriel. Le cycle haussmannien (L'Histoire de la France urbaine, t.4),* Seuil, coll. « Points Histoire», 1998, p. 182.

26 Jean-Pierre Gaudin, *L'Avenir en plan. Technique et politique dans la prévision urbaine. 1900-1930,* Champ Vallon, 1985, p. 56.

27 *Ibid.*, p. 66.

28 *Ibid.*, 191-192.

29 この『プラン』はプレ・ファシズム的傾向を持つ雑誌とみなされており、この雑誌との関わりは近年のル・コルビュジエ研究において大きな議論となっている。例えばル・コルビュジエ批判に対する応答として編まれた以下を参照のこと。Remi Baudoui et Arnaud Dercelles (ed.), *Le Corbusier 1930-2020. Polémiques, memoire et histoire,* Tallandier,

2020.

30 すでにゾラの『労働』については例えば以下の論文で取り上げた。彦江智弘「〈言葉の受肉〉としての引用――ゾラとトニー・ガルニエのユートピア」、篠田勝英ほか（編）『引用の文学史――フランス中世から20世紀文学におけるリライトの歴史』水声社、2019.

（都市イノベーション研究院・教授）

« Le plan de la ville » selon Rimbaud — de « Ville » à Le Corbusier

Tomohiro Hikoe

Quand on aborde la littérature de la 3e République du point de vue urbanistique, quels textes pourront apparaître les plus fondamentaux. On pourrait en citer plusieurs comme *Travail* de Zola ou *Les Cinq Cents Millions de la Bégum* de Jules Verne. Mais Certains textes de Rimbaud concernant la ville, entre autres quelques poèmes en prose recueillis dans *Les Illuminations* comme « Villes [I] », « Villes [II] » ou « Métropolitain », devraient occuper une place primordiale. Parmi ces textes de Rimbaud, nous nous focaliserons dans cet article sur « Ville », voire sur une expression qui apparaît dans la première phrase du texte : « le plan de la ville ». Pourquoi cette expression à la première vue plutôt anodine ? C'est parce que le « plan » était justement l'un des concepts directeurs de l'urbanisme naissant à la charnière du XIXe et du XXe siècle ; le « plan » constituait une base de l'urbanisme pour les réformateurs sociaux du Musée social ainsi que pour les architectes comme Le Corbusier. En partant de cette constatation, nous nous proposons une possibilité de lire « Ville », non pas comme un texte reflétant la vie londonienne de Rimbaud, mais en le mettant en parallèle avec les tâtonnements et développement de l'urbanisme des premiers temps. On ne peut pourtant pas ignorer qu'une telle lecture paraît inéluctablement anachronique. Car « Ville » fut probablement conçue dans la première moitié des années 1870, c'est-à-dire à l'époque où l'urbanisme au sens étroit n'a pas encore vu le jour. Or, la ville qui se déploie devant « je » donné tout au début du texte se révélera alors effectivement conçue et organisée de telle façon que l'urbanisme naissant orientait ses recherches sur la ville. D'une certaine façon, « Ville » est un texte poétique dans lequel est inscrit un avenir d'urbanisme.

（Professor, Institute of Urban Innovation）